

草書心経の臨書

河内 利治(君平)
Toshiharu (Kunpei) Kawachi

日本で写経といえは「般若波羅蜜多心経(般若心経・心経)」を小楷で書くことが普及している。写経用に罫線を印刷した経箋や写巻といった小筆も販売されている。心経は小楷の技法を習得するに

適した佛経だからであろうが、本来は自己の精神鍛錬のため、あるいは誰かの健康長寿を祈願するため、さらには物故者供養のために書くものである。かつてゼミ生が卒業した年に亡くなり、有志一同でご遺族に小楷心経を奉納したが、これは追善供養である。

このたび同僚の鷹之先生が急逝され、居ても立ってもおられず心経を書こうと決めた。しかし小楷では、なかなか心が鎮まらない。偶然、^{ネット}に「張旭草書心経」の画像(以下「草書心経」と略す^①)を見つけ、これを臨書することにした。落款はなく、張旭の書と伝えられる刻本で、心経を唱えつつ一氣に書いた。

張旭の墨跡では、「古詩四帖(遼寧省博物館蔵)」と「自言帖(台北故宫博物院蔵)」が著名だが、ともに偽跡の可能性が高い。^②ここ

では真偽はさて置き、「草書心経」を臨書した心会と、その後に『張旭草書選』に収録する諸帖^③とを比較した心会を書き留めておきたい。

「草書心経」臨書

①狼毫が適している。穂先3.5cmの善璉湖「純狼毫小長鋒」を使用した。

②転折など筆がターンする所のバネが強いため中鋒に徹する事。

③にも当てはまる。

③一字の中で連続する場合、二字三字と多字数連続する場合も、太細の変化に富む。

諸帖との比較

①「心経」と「千字文(残石)」の刻風(書風)が近似している。

②「古詩四帖」の草体のように、縦画がほぼ垂直であるのには似ない。

③「晚復帖」「十五日帖」「知汝帖」「病不退帖」等と同様に曲線部に弾力がある。

清末の劉熙載（一八一三〜八一）は、その著『書概』⁽¹⁾において、張旭（長史）について七条にわたり述べている（稿者は「へ」を審美術語と考える）。

・（孫）過庭『書譜』は右軍の書を「不激不厲」と称し、杜少陵（甫）は張長史の草書を「豪蕩感激」と称す。実まことに則ち止水、流水の如く、二水に有る非ざるなり。

・張長史の真書『郎官石記』（蘇）東坡「作字は「簡遠」にして、晋、宋の間の人の如し」と謂う。論者以て知言と為す。然して張の草を学ぶ者、往往にして未だ其の法を究めず、先ず「狂怪」の意を挾む。豈に草の固より其の真より出づるを知らず、而して長史の真を何如せんや。（黄）山谷は「京洛の間の人、「狂怪」の字を伝摹するは、右軍父子の繩墨に入らざる者にして、皆な長史の筆に非ず」と言う。此れを審らかにし、而して長史の真出づるなり。

・草書を学ぶ者、本を分隸二篆に探し、自ら以て尚ぶべからずと為す。張長史、之を古鐘鼎銘、科斗篆に得て、却て以て之を觴見せず。此れ其れ彼を視るや、猶お（北）海若、河伯に之くがごとからざらんや。

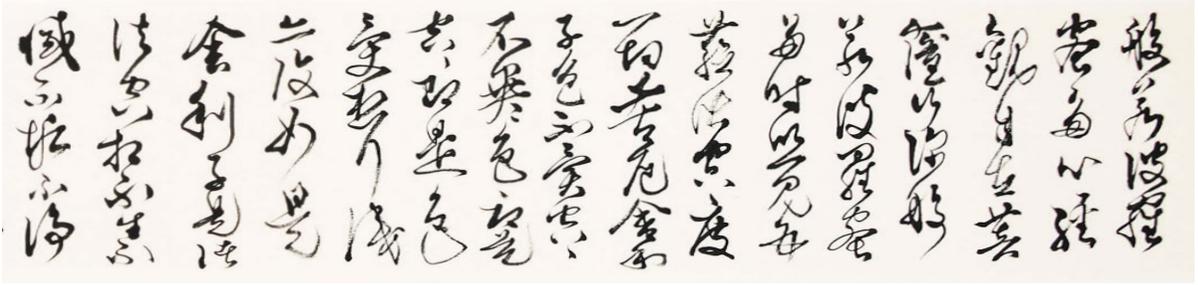
・韓昌黎（愈）、張旭の書を「變動すること猶お鬼神（超人的な力をもつ靈的存在）のごとく、端倪すべからず（予測できない）」と謂う。此の語は奇に似て常なり。夫れ鬼神の道も亦た屈信（＝屈伸）、闔辟（＝開合）に外ならざるのみ。

・長史、懷素は皆な伯英（張芝）の今草を祖とす。長史の「千文」残本は、「雄古深邃」にして、邈焉とよからずくとして儻寡とよからずくなきなり。（以下省略）

・張長史の書は悲喜双つながら「用」い、懷素の書は悲喜双つながら「遣」るなり。

・旭、素の書は「謹嚴」の極みと謂うべし。或ひと以て「顛狂」と為して之を学ぶは、宋向氏の盗みを学ぶと何ぞ異ならんや。旭、素必ず之を謂いて曰く、「顛狂の道を失うこと此に至るが若きや」と。

以上から、張旭の草書に関する審美術語を整理すると、「豪蕩感激」〈雄古深邃〉「謹嚴」および「狂怪」〈顛狂〉に帰着する。この点については稿を改めて考えたいが、一点だけ「草書心経」臨書的心会として挙げるならば、「狂怪」〈顛狂〉の先入観で臨書しても「豪蕩感激」〈雄古深邃〉「謹嚴」の審美の境地には到達し得ないという事である。まさしく黄山谷がいう「狂怪の字を伝摹するは、右軍父子の繩墨に入らざる者にして、皆な長史の筆に非ず」である。

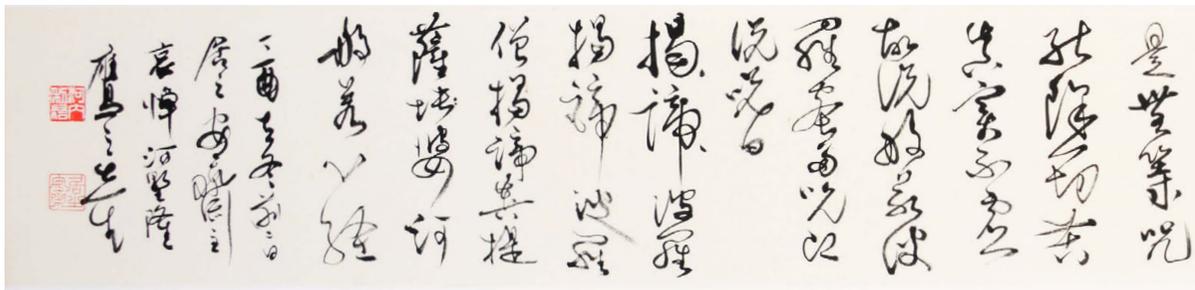
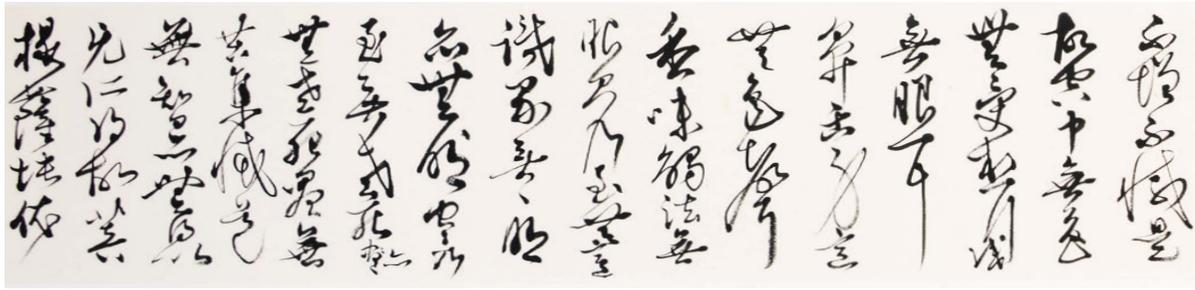


故人（鬼神）が拙作を韓愈のように「端倪すべからず」と言ってしまうか知る由もない。

（注）

- （1）『唐宋十二名家書法集』全十二冊（上海书画出版社、一九九二年）中の一冊「張旭」にこの草書心経が掲載されている。小稿では、「唐代張旭草書作品欣賞《心経》：書法圖片29張（<http://www.yac8.com/news/6948.html>）」の画像を用いて臨書した。ネット上の画像の質は近年非常に高く、タブレットで見ると十分だからである。それには次のような解説（原文中国語）がある。——張旭「草書心経」は、最も古くは『碑刻拔萃』に見える。その「唐草心経」碑目下に「張旭」と書いてある。これは昔碑林にあり、明の成化年間に知府であった孫仁が百塔寺から移送した「草書心経」である。『閩中金石文字存逸考』には二種の草書「心経」をともに記録しており、その「心経、肚痛帖、千文断碑」の条下に「均しく張旭草書、無年月」と注してあり、ならびに「右三石は均しく西安碑林に在り」と称している。近年の記録では、張旭「草書心経」は民国三年（一九一四）の『碑林碑目表』に見えるが、その後所在不明である。

- （2）楊仁愷先生のように「古詩四帖」を張旭の真跡と考える学者もい



草書心經の臨書を以て河野隆鷹之先生を哀悼す

る。

- (3) 『張旭草書選』(孫寶文編、館藏國寶墨迹、肆拾玖、上海辭書出版社、二〇一二年)には、「古詩四帖」、「晚復帖」、「十五日帖」(ともに『淳化閣帖』卷五)、米芾が張旭の書と考えた張芝の「知汝帖」(『淳化閣帖』卷二)、王献之の「病不退帖」(『淳化閣帖』卷十)、「千字文(残石)」、「肚痛帖」を収録する。

- (4) テキストは金学智『書概評注』(上海書画出版社、一九九〇年)を使用した。